

景観フォーラム

日本景観フォーラム会報 6号 (2012年7月1日)



巻頭言

ギリシアの財政危機が叫ばれ、スペインなどに飛び火し、アイルランド、ポルトガルを加えて、EU27諸国の財政危機に悩む国をPIG'sと称するそうです。戦乱に明けくれた300年を乗り越えて、ユーロという統一貨幣(現在17カ国)によった人的文化的交流の活性化の大実験は頓挫するのでしょうか。EU加盟27カ国は皆それぞれ色濃い個性を持ち、固有な価値ある景観の中でコミュニティを大事にしているように見えますが、アメリカを中心としたグローバル化の大波は経済ばかりではなく、EU諸国のコミュニティに大きな影響を与

えていることでしょう。

さて、景観とコミュニティの関係を考察する団体として、EU諸国の動きは眼を離せません。第二次世界大戦の多大な被災から素晴らしい景観を復興したEU諸国のコミュニティは、成熟した民主主義の執行により良き景観を作り上げたことを証明したのであり、政治と経済は常にコインの裏表であることからして、東北被災地の復興をどのようにするかを考える時、景観とコミュニティが実践する民主主義の関係を考察することも必要な思いがしてくる昨今です。(齊藤全彦)

予定

7月20日(金)

テーマ：異境の景観 ブータン王国の姿と変化

講師：福永正明(日本GNH学会 常任理事・事務局長)

場所：JICA地球広場(広尾)

8月

景観行政視察予定

(日程、場所は検討中)

9月

JICA地球ひろば移転のため
セミナーはお休みします。

※セミナーの会場はJICA地球広場の移転により、10月から市ヶ谷(現在はJICA研究所)施設で開催します。住所は、新宿区市谷本村町10-5(最寄駅・市ヶ谷)

吾野プロジェクト アズの里に蛍が飛び交う水車と星空のみえる風景

大河原義重 吾野宿再生と吾野を語る会代表



吾野は緑豊かな土地である。古くから優良な材木を産し、高麗川源流を持つ文化の里でもあった。この緑豊かな自然を活用し、いかに本来の豊かさとは何かをこの地で体験してもらうことが大目標である。

まず、豊かな清流を用いて現在も行っているホテルの観賞会をより大きくして、埼玉の蛍と言え先ず、吾野が思い浮かべるぐらいに努力したい。それから、アズは今でも高価でありながら古来からカラモモといわれてきた、品の良いそして用途の多岐にわたる果物である。日本では長野千曲市が有名であるが、埼玉からのあずの里が出来てもいいのではないかな。



次に、清流を活かした水車を作り昔吾野ではあちこちで見られた水車の風景を電力を作ることで享受してもらおう。また、吾野は都会では味わえない星空の宝庫がある。吾野に行けばきらめく星が見られるという具合に天然プラネタリウムの設備を整える必要がある。

そこで、目的の具体性では、アズは緑が現金収入に直結し、蛍は環境保護のシンボルであり、水車は過去と現在をつなぐ歴史の研究機会ならびにエネルギー問題と環境問題を根底から考えるいい機会になり、そして星空観察場は少ない投資で多くの集客が考えられ、若人に希望を与える良い機会になる。

以上の観点から、このプロジェクトの根幹にあるのは“景観から考えるまちづくり”というものであり、この吾野という地に都会から来た人々が「ほっとできるな」「ずっといたくなるようなところだな」と言わしめるような現在以上に緑の自然景観のある本来の豊かな地にすることである。また、以上のプロジェクトが環境教育を自然に後押しし、若い世代がこの地を

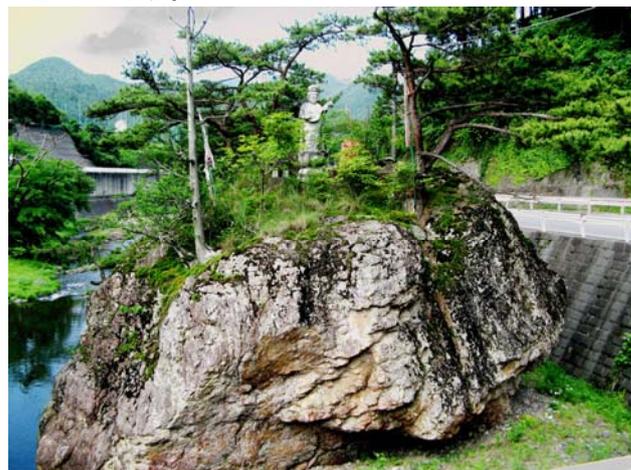


訪れることで埼玉のそして日本のそして世界の自然と環境を考える場として、そのトリガーとなるのは必定である。

以上のことは、吾野のまちおこしに通じる事は間違いないであるが、その逆であってはならない。即ち“景観から考えるまちづくり”は持続可能なまちづくりであって、短期的・短絡的なまちづくりではあってはならないからである。

上記のプロジェクトを長期的に支える仕組みとして、アズの里、ホテルの里、そして水車の里、はそれぞれ吾野と言う地域を活用したサミットを考えている。以上の三つの里は先ず日本国内の呼びかけをし、それから世界に呼び掛ける。また、星空観察会は、初めから世界の人々に呼び掛けていだろう。

また、その土地に根付く文化的観点から、吾野はコマと言う名のごとく高句麗文化の継承地であった。吾野と韓国各地にある高句麗文化拠点との交流こそ、文化的刺激を高めあうことによって、これからの創造都市への挑戦となるであろう。



ブックレビュー

『創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ』

佐々木雅幸著
現代岩波文庫 2012年

「創造都市」を簡単に説明すれば、独創的で革新的な何かを生み出しつつある都市、ということになる。即ち、都市においてそこに息づく「人間の作る能力」に注目するということになる。著者はこのコンセプトを日本及び世界各地の都市を巡りその創造の証を紹介する。

まずはイタリア北部の中核都市ボローニャ。もともと中世から続く職人が溢れるものづくりの盛んなところであり、ヨーロッパ最古のボローニャ大学を有す教育都市でもある。しかし、その都市も1990年代になると市場万能のグローバリゼーションの大きな波に巻き込まれ、その対抗策として「第三の道」路線を歩みだした。それはイギリス・ドイツ・フランスなどと同様に政治的リーダーシップの発揮により中道左派政権誕生をもたらし、「産業政策のみならず文化や福祉の分野で協同組合や非営利組織

と公共部門との連携・協同の取り組みによって住民の自発性と創造性を引き上げて、財政危機を創造的に克服し、「福祉国家」を超えた「分権的福祉社会」の具体的なイメージが作り出された」ということである。景観的にいえば古い町を如何に創造的に活かすかという問題に答え、古い街並みと建築物を活用する際、内部は現代的に効率よく変え、外部を含めた構造は変えられない、というボローニャ方式である。

そして、具体的な職人企業と新たな事業形態としての事例の紹介がされる。金沢における文化資本の活用事例、イギリスの産業革命をリードしたバーミンガムにおける人間中心主義の都心再生戦略の復活事例、ドイツ南東部に位置するフライブルクの環境文化創造都市の事例、バルセロナ・モントリオールの芸術都市の挑戦、京都西陣の「ほんもの」コンセプトと桐生の事例、三鷹市のSOHO、渋谷のビットバレー、大田区のITネットワーク、秋田のたざわこ芸術村などの事例に溢れる。著者は、これらを支える条件の大きなものとして「自然環境と伝統的街並みが保全され、地域住民の創造力と感性を高める景観の美しさを備えた地域」を指摘する。新たな産業創造には健全なコミュニティと良き景観が必須条件であろう。(斉藤全彦)

VOICE

中等教育の参考に

吉川謙太郎 (湘南学園中学校・高等学校教諭)



日本景観フォーラムの会員の皆様、はじめまして、この度、会員に加わらせていただくことになりました吉川謙太郎と申します。

私は、藤沢市にあり湘南学園という私立中高一貫校(日本史)の教員を

しております。今まで「景観」には全くといっていいほど縁がありませんでしたが、4月の景観セミナーに参加させていただいたことをきっかけとして、興味関心を持ち始めています。今では、景観の考え方が中等教育の在り方を考える上でも、とても参考になるのではないかなと思うようになってきました。

勤務校は、江ノ島に程近い、鶴沼の住宅地の中にあります。ある人にいわせると「キング・オブ・湘南」の地です。しかし、最近では、かつての別荘地の名残ともいえる大きな区画がいくつもの小区画に分けられ、周辺の佇まいがかなり変わってきています。「これは景観上の問題なのではないか」とは思いつつ、何がどう問題で、どうすれば良いのかなどということは明確には分かりません。要は、まだその程度の認識しか持たえていない「駆けだし中年」ということです。情けない独白で終わってしまいましたが、どうか皆様、今後ともよろしくお願ひいたします。

福島との縁を頼りに

清野和樹 (日本景観フォーラム事務局員)



幼少時に両親に教わった高村光太郎の詩が当時の私に強い影響を与えた。それは、「智恵子は東京に空が無いといふ。ほんとの空が見たいといふ。私は驚いて空を見る。桜若葉の間に在るのは、切っても切れないむかしなじみのきれいな空だ」。

智恵子も育った自然豊かな福島で育った私だが、最初から景観に関心を持っていたわけではなかった。小学生時から福島の歴史に興味を持ち会津や二本松など各地を訪れ、「花見山」や「大内宿」などの歴史、景観、食文化に触れてきた。しかしながら、景観の知識を深めるまでには至らなかった。何故なら、景観は不変であると考えていたからだ。それから約10年後、福島原発事故により私の考えは全否定された。

原発事故により事故前と事故後の福島は180度違うものとなってしまった。事故前まで自然は人々に癒しを与えていたが、事故により恐怖を植え付け自然との接触を控えるようになった。もし仮に現在の状況が続けば、美しい景観が失われてしまうという危機感がある。そのような意味で福島原発事故は私に大きな影響を与え、景観に関心を持つようになった。

私は当団体で唯一無二である若さという武器を活かし、様々な活動に参加することで知識を深めていきたい。そして、いずれは切っても切れない福島との縁を頼りに地域貢献したいと考えている。

これまでのいろいろ

内から外へ

日本を電線列島から解放せよ！

豊村 泰彦

景観、ケイカン、けいかん、人は生活する限り、毎日、景観と直面する。しかしそれは多くの都会人にとって、気持ちのいい景観とはなっていない。玄関から一歩足を踏み出し、上を見上げると、空中を張り巡らせた電線が空に不規則な線模様を描いているの見える。ギラリと光る電線と無機質なコンクリートの電柱が織りなす冷たい並木道を歩き、駅に向かう。そういう毎日である。日本人は頗る我慢強い国民である。そういう景観を許している。我が国の送電線を独占している電力会社が、電柱に不規則で見にくい線を張り巡らしても、黙って、できるだけ見ないようにして生活している。また、消費者から分捕った電気料金の一部を街の美化には鏝一文出さなくても電力会社に腹を立てている様子も見えない。昨年、福島で原発事故が起こり、誰が見ても電力会社の重大な過失及び刑事責任の疑いさえあるにも関わらず、国民はその企業の存続を許している。これが独裁政権国家だったら、上から揉み潰されても分かる。しかし、民主主義国家で自由経済の国家でこんなことはあり得るのだろうか。ありえへんというのが普通だと思いがいかか？



ときなりのぼやきで始まったが、良い景観みたい！ってことで、先日、最近良いうわさが立っているダイカンヤマというところに行った。ダイカンヤマというの

はダイカンと名が付いているように徳川家の眷属などが住んでいたところらしい。代官屋敷などはもう過去のことでその類はもう影も形もないが、旧山手通り添いについ最近、蔦谷書店が出現し、またぞろ人が群れているというので、徐々に野次馬根性を出してみた。するとそこはなんとオープンカフェの村、オープンカフェのこんにやく畑。蔦谷書店も、そのまわりのお店や公園もオープンカフェ天国だったのだ。ここはパリを目指しているのか！、と叫びたくなった。こういう場所こそダラダラ族には堪えられない。だって、昼間からビールかなんか飲みながら、読書に新聞に人間観察し放題である。こういうオープンカフェが出回るとは大歓迎の権現様。東京に居ながらにしてリゾート気分になれる。こういうところが他でもどんどんできると庶民にとってもよいのだが、どこにでも生え、育つものではない。ここは資本的にはほとんど民間の力でできた施



蔦谷書店内にあるオープンカフェ

設だが、かなり地元の人たちの賛同、協力もあったという。つまり昔からこの地域はまちづくりに対する高い意識があったのである。なので、ダイカンヤマのようなところがこれからあちこちにできるかというそれはなかなか難しいと思う。だいたい日本というところは、オープン(開放的)ではなくクローズ(閉鎖的)が主流である。それは国民性もあるが、まちの構造自体がオープンになっていない。内と外との境界がはっきりとしていて、どちらかという、内に重点が置かれ、外側はあまり重視しない。とにかく外部はあまり見ない、ていうかほとんど見ない。もともと、電信柱と電線だらけの景色は見たくない。見ないから、蜘蛛の巣の代わりに電線が張らるのか？

景観が良くなるためには、日本人の価値観を内から外へと転換していかなければならないと思う。外を重視する。日本も温暖化になったので、生活のパターンを「南の島」型に替えていく。つまり外で食事をし、外で風呂に入り、外で歯を磨き、寝るときだけ、家の中で寝る。そういう生活習慣が身に付けば自然と外側を重視し、みんな景観を考えるだろう。そうなると、電力会社の景観への冒涇を人に見逃さなくなる。電気代未納運動、電力会社への抗議デモ、廃品回収の呼びかけ攻撃なども起こる。すると、政府も政治家も景観を軽視できなくなり、すぐに内閣府に電線地中化推進協議会ができ、超党派で景観議員連盟ができる。となると、景観対策が目覚ましいほど進む。その早さは、戦後復興期の日本を彷彿とさせ、おそらく、10年で、日本の景観は豹変するかもしれない。長い間の海外勤務から帰って来た人が、「え？これ本当に日本？」と驚いて腰を抜かすかもしれない。だから、ダイカンヤマのカフェは社会改革の前兆となるかもしれないのだ。「内から外へ」これがこれからの日本改革のキーワードであると思う。

特定非営利活動法人 日本景観フォーラム

〒152-0011 東京都目黒区原町2-8-14-301

TEL 03-6802-7331 FAX 03-3793-9192

E-mail info@keikan-forum.comURL: <http://keikan-forum.com/>